

# 手術後の経過はわかっているの (予後)

頸椎症性脊髄症けいついしょうせいせきずいしょうの手術の目的は、前方法あるいは後方法のどちらの方法でも(第5章を参照して下さい)、脊髄が受けている圧迫を取って脊髄自体の治る力(回復力)を引き出すことにあります。

いったん手術によって得られた症状の改善はかなりよく続きます。しかし、高齢けいついの患者さんでは手術をした部位以外の頸椎けいつい、腰こし、膝ひざや股関節こかんせつなどでの老化の進行によって、また足の動脈硬化どうみやくこうかによって、同じような症状が再び起こることもあります。

手術によって最大限に症状の改善を引き出して維持するために、また、他の原因による症状出現のチェックのためにも、定期的に主治医へ通院して経過を観察してもらい、相談することが大切です。

# 1

## 手術によって良くなりやすい症状と変わりにくい症状はありますか？

はっきりと定まった結論はありません。しかし、「歩きにくい」、  
「手の使い勝手が悪い（箸が使いにくい、ボタンかけがしにくい、  
字が書きにくいなど）」といった症状は多くの場合、ある程度の改  
善が期待でき、一般に良くなりやすい症状と考えられています。

一方、「手足のしびれ感や重だるさ」、「手のこわばり感」などは、  
軽減しても残りやすい傾向があり、手術の後も変わりにくい症状と  
考えられます。また、手術の効果が出にくい要因としては、年齢や  
手術前の状態について表1のようなことが考えられます **推奨度C**。

表1 頸椎症性脊髄症の症状が手術後に良くなりにくい要因

1. 手術前に症状があった期間が長い
2. 手術前の症状が重い
3. 手術前のMRI検査で脊髄の圧迫が強い
4. 高齢
5. 頸椎に後わん\*がある
6. 外傷をきっかけに症状が出現した

### ★後わん

正常な頸椎の並びは前が凸の形状（前わん）  
になっています。後わんは逆に後方が凸の形  
状となります（図1）。

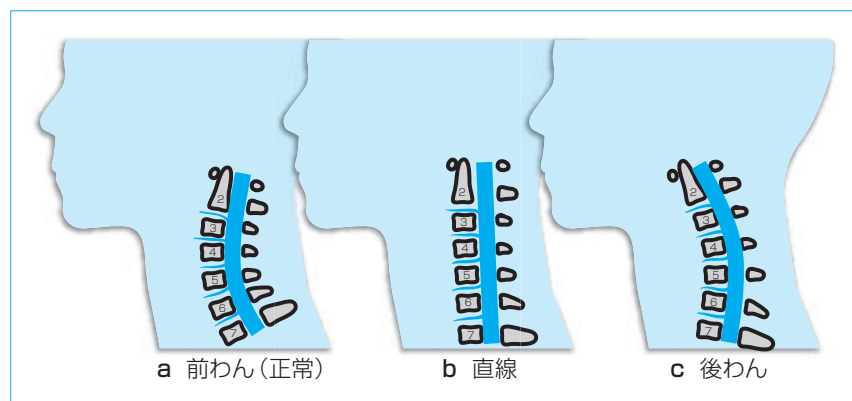


図1 頸椎のわん曲

## 2

# 手術後に症状が再び悪くなることがありますか？

後方法では、手術した部位で再び症状が悪くなることはほとんどありません。前方法では固定した範囲の隣の椎間板が変性して、頸椎症が進行したために手足の症状が再び出ることがあります。

そのほか、腰、膝、股関節などの老化、足の動脈硬化のために、いずれも足の痛みやしびれ、歩行障害が起こることがあります(表2)。

表2 手術後に症状が再び悪くなる原因

1. 頸椎の手術をした部位以外での老化の進行
2. 腰部脊柱管狭窄症\*
3. 変形性膝関節症\*、変形性股関節症\*
4. 閉塞性動脈硬化症\*
5. 神経自体の病気 ----- 脳梗塞、パーキンソン病、糖尿病、など

### ★腰部脊柱管狭窄症

老化に伴う変化によって、腰部の脊柱管が狭くなって神経を圧迫するために足の痛みやしびれが起こり、歩行が困難(間欠跛行が特徴)となります。

### ★変形性膝関節症、変形性股関節症

膝関節や股関節の軟骨が老化のためにすり減って、動かしたときや歩行の時に関節の痛みを生じます。

### ★閉塞性動脈硬化症

足の動脈硬化によって血液の流れが悪くなると、歩いたときに足の痛みを生じて歩行が困難となります。

# 3

## 退院後の日常生活はどのようにしたらよいでしょうか？

後方法では、日常生活の動作で特に制限はありませんが、転倒には注意する必要があります。デスクワークなどの軽作業の復帰は手術後約1ヵ月以降、スポーツや立位での仕事への復帰は手術後2ヵ月以降が目安となります。

前方法では、<sup>けいついそうく</sup>頸椎装具で固定している間はそれに応じた制限がありますが、装具を外した後は後方法と同じです。スポーツや立位での仕事へは移植した骨がつくまで復帰できません（少なくとも2～3ヵ月以降）。

### 定期的な通院が大事

日常生活での注意点は、病院によって多少異なります。それぞれの患者さんの状態や手術方法にも影響を受けますので、細かい点は主治医とよく相談されることをお勧めします。さらに、手術後も定期的に主治医へ通院して、長期にわたって経過を観察しながら相談することが、より良い状態を維持するために大切です（表3）。

表3 手術後における日常生活の注意点

1. 家庭生活における日常生活動作は積極的に
2. 転倒に注意
3. デスクワークへの復帰は1ヵ月以降
4. 立位での仕事やスポーツ復帰は2ヵ月以降
5. 主治医へ定期的に通院して指導を受ける